



TITLE:

<Book Review>Teeuw, A., A Critical Survey of Studies on Malay and Bahasa Indonesia (Koninklijk instituut voor taal-land-en volkenkunde. Bibliographical Series 5). 'S-Gravenhage, Martinus Nijhoff, 1961,pp.176

AUTHOR(S):

崎山, 理

CITATION:

崎山, 理. <Book Review>Teeuw, A., A Critical Survey of Studies on Malay and Bahasa Indonesia (Koninklijk instituut voor taal-land-en volkenkunde. Bibliographical Series 5). 'S-Gravenhage, Martinus Nijhoff, 1961,pp.176. 東南アジア研究 1964, 1(3): 105-106

ISSUE DATE:

1964

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54839>

RIGHT:

通りでまず問題もないが(pp. 1105~), 米の方はそのような方法はそれで良いとして Echols は Phoneme の概念が充分分っていないらしい。例えば, hal <事>, sudah <既に> を /hal/, /sudah/ とする一方, achir <終> を /achir/ と解釈するのは何のことか (p. xvi)。achir の発音は [açir] であるが ç は前母音 i の環境によってそうなるからで、音韻的には /ahir/ である。grapheme と phoneme とを混同してはいけない。更に ra'jat; rakjat <人民>, ma'; mak <母> ((', k は語中で表記上どちらも使われるか、又は、全く書かれない) を /raqjat/, /maq/ としてしまっているが, ta'at <信心>; takat <…迄> は夫々 /taqat/; /takat/ となって、一律に彼のように解釈できない。その上, baik <良い> を /baiq/ とすると kebaikan <美点> は /kəbaikan/ であって /q/ ではない。即ち、音韻的には baik, ra'jat; rakjat, ma'; mak など /q/ と /k/ とが allophone をなすと看さねばならない。(尚、彼は ' と何の説明もない ' とを混同して用いているが統一すべきである。)

at random に語彙の方を見ると、ソの方で budu <魚の塩漬>, tuak <ヤシ酒>, unam <宿借り> などの訳に原語をそのまま示し、説明的な意味が添えてあるが、一体この原語がロシア語の中で借用語としてどの程度認められているのであろうか。一見科学的に見えるこの方法には問題がある。潔癖になりすぎて意志の疏通が計れないようでは言語の機能をなさない。両書に次のような生活必須語が欠けていた。pulun <(サロンなどを)振って留める>, rimpi <干しバナナ>, selajun <烏威し> 等々。又、語源が両書において全く記入されていないが、特にサンスクリット、アラビア、近年では、ポルトガル、オランダからの借用語が多いインドネシア語では、少なくとも前者の記入が使用者の大部分にとって必要であろうと考えられる。但し、新語が数多く取入れられてあるのは、やはり新しい辞書だけの価値がある。両書でお互いの短所を補いつつ活用すれば、それに越したことはない。(崎山 理)

Teeuw, A.: A Critical Survey of Studies on Malay and Bahasa Indonesia (Koninklijk instituut voor taal- land- en volkenkunde. Bibliographical Series 5). 'S-Gravenhage, Martinus Nijhoff. 1961. pp. 176

マライ (インドネシア) 語の最古の碑文 (7 世紀) から現在までのマライ語研究史である。これまでに出了れた英、仏、独、蘭、マライ語の殆んど凡ての論文、書物が p. 91~157 に文献目録として掲げられており、これだけでも結構役に立つ訳であるが、前半は、マライ語のどういう部門の研究が誰によってどのようになされてきたかが36項目にわたって手際よく述べられてある。Teeuw は彼の見解を加えず出来るだけ客観的に今までの研究を並べ立てるという態度を取っており、それによって現在までの研究傾向が分り、そして今後の研究に無駄のない指針が与えられるであろう。マライ語の言語学的研究において、音韻、形態の面では優れた成果も現われているが、彼もいっているように "syntax" (特に "sentence pattern" 「文型」 という概念をも含めていっているのであろう) の研究は未だ "virgin field" のまま残されている (p. 30)。マライ語は、文の中の語詞同志の結びつきが比較的柔らかく、それらが自由に動き得るところからかつて Marsden がマライ語の文の構成は "natural course of ideas" にあるといて深い研究に進もうとしなかった傾向は、確かに今も続いているのである。何か暗黙のうちに分ったものとして扱われてきた "syntax" を今後科学的組上に載せなければならない。

36項目のうち、最後の4項目は現地で定期刊行物、"Dewan Bahasa" 「言語会議」、"Pembira Bahasa Indonesia" 「インドネシア語建設者」、"Medan Bahasa" 「言語界」、"Bahasa dan Budaya" 「言語と文化」誌上における種々な言語問題、論争が取上げられてある。特に「受動形」「能動形」の用法の区別の問題は前世紀に始まって (p. 28) 今だに論議されているのである (p. 78, p. 83)。現地人の自国語に対する研究意欲を見るとこの言語の将来が頼もしく思われる。

尚、この書においてマライ語諸方言の項は不完全だから、その中でも今までに出了れたこの同じ Series には入っている "A. A. Cense: Languages of Borneo. Series 2, 1958.", "P. Voorhoeve: Languages of Sumatra. Series 1, 1955." を参照するのがよからう。方言の調査研究はまだ不備だから、これからも強力に行なわれる必要がある。Teeuw は現代最も活躍しているオランダ人のマライ語学者であ

る。この書物の文献目録には出ていないけれども、ジャカルタの Balai Pustaka から "Atlas Dialek Pulau Lombok, 1954." 「ロンボク島方言地図」なども出している（もっとも、これは1951年の同氏による英蘭語版からの翻訳である）。

マライ語研究者の座右にこの書を備えることによって研究がよりスムーズに進むことになる。附録として p. 158~171 にマライ語の実用手引書、教科書のリストが添えられてあるがこれも便利である。

（崎山 理）

Winstedt, R. O. : The Malay Magician, being Shaman, Saiva and Sufi. Revised and enlarged with a Malay Appendix. Routledge and Kegan Paul, London. 1961. pp. 180

宇野円空博士は、マレー人の宗教を、「インド教の果実を民族宗教の肉汁で煮て、マホメット教の容器に盛った」ようなものと概括されている。（マライシアに於ける稲米儀礼）。古くから大陸と島嶼地域を結ぶ懸橋であったマラヤは、様々な人種や文化の交流の場であったから、マラヤの文化が極めて異質的な諸要素から構成されているとしても不思議ではない。本書において、Winstedt は複雑なマレー呪術の体系を構成する異質的な諸要素の解明を試みている。

しかし、マラヤの民族宗教は、民族学において、早くから研究されていた為、Winstedt の民族宗教に関する叙述では、別に新鮮味は見出されない。唯、Winstedt の現地についての該博な知識は、従来不明確であった部分を補っている。Winstedt によれば、マレー人の間には二通りの呪師が存在する。一つは世襲の呪師（pawang）であり、他は、神経症的巫者（bĕlian）である。専門の呪医は bomor と呼ばれる。Negritos や原始マレー族では、呪師に対する敬意を表現する意味において、樹上葬などが行なわれたが、農耕地域では埋葬形式が一般的である。巫者の性は、ヒンズー教や回教の影響を受けて、一般に男性であるが、母系制地域では女性である。崇拜の対象となる生霊は、Sĕmangat と呼ばれる生命力であり、それは靈魂ではない。死者霊に似た觀念はあっても、祖先崇拜はなく、それは、むしろ人格的生霊である。

このような民族宗教の「肉汁」は、四世紀頃よりヒ

ンズー教の「果実」を受入れる。後者がもたらしたものは、地方の生霊を組織だてる宇宙神の体系、呪術の地位を確立する諸技術（断食、冥想など）、呪文祭詞（mantra）、占星学、神王の觀念、護符などであるが、これらは、呪師や王の神格化には貴重であっても、農民の民族信仰の内容を根本的に変革するものではなかった。

以上の混淆物は、更に十四世紀頃より回教という「容器」に吸収され、アラールの神の統制下に置かれる。しかし、アラールの神は、マレー農民の日常生活から余りにもかけ離れた存在である。嘆願の祭詞、供儀の内容や意味は回教化され、ト占や護符、呪薬も回教の影響を受け、回教徒の悪霊も導入されたが、これらの変化にもかかわらず、農民は、食物の生霊保護のために民族宗教の内容を未だに保持している。農耕儀礼や人の一生の折目折目の儀礼は、回教のヴェールを覆った民族宗教を内容としている。外来信仰を受入れたのは、むしろ、王朝都市や港町の住民であった。

以上の事柄について、Winstedt は具体的に、そしてやや随想的に叙述する。従って、本書は、神々の名や由来に親しみのない者には、理解し難い所も少なくないが、マラヤの社会構造の思想的背景を歴史的に理解する上に、多くの示唆を与えている。

（口羽益生）

Cheeseman, H. R. (Compiled by) : Bibliography of Malaya. Longmans, Green and Co., 1959. xi + 234

この文献目録は副題に示されたようにマラヤとシンガポールに関する、一部又は全部が英語で書かれた文献の分類目録である。1955年 British Association of Malaya の当時の総裁 E. D. Shearn 氏の要求で Cheeseman 氏が採録に当たったもので、図書館としては、Malaya House, Royal Commonwealth Society, London Library, Penang 及び Singapore Library, University of Malaya Library, Washington Library of Congress などに当り、更に官庁や学会としてはフェデレイションの農業、文部、森林及び博物館の助力、SBRAS (Straits Branch of the Royal Asiatic Society), MBRAS (Malayan Branch of the Royal Asiatic Society) 及び Malayan Historical Society の助けを得てい